

教育

日本の教育へ一言

大学を除く日本の教育課程は十年を目途に、路線の修正が行われる。言うまでも無く教育課程の変更はわが国の将来の指針を決定するもので、変更に携わるメンバーの責任は重大である。

世の中は明日を読むことが難しいことは云うまでもない。ましてや、世界の動向を見据えて国家の将来の方向を決める教育課程の方針を決めることは、わが国を代表する第一級の学者先生でも、方針のベクトルは勿論、文言の表現には緊張感が伴うはずである。私は太平洋戦争終結の詔勅の草稿を書いた方の書物を読む機会があった。当然のことながら、一言一句の表現の間違ひは、一命に代えても許されなかったと云うことが書かれていた。

さて、話は飛躍するが、二十年数年前の教育課程の総則に「生きる力の養成」という表現が登場した。当時、私は教育現場にいたが、児童生徒に生きる力をつける教育とはいったいどんな教育なのだろうと考え込んでしまったことを覚えている。人間は生きることが本能であり、これは「より良く生きる力」の表記違いではないかと思つたからである。これに対し外国のメディアは、日本では子供たちに「生きる方法を教える」ことになった。と報じた。解釈の揺れは私

だけではなかったのである。実は、今、教育の現場は、大海に浮かぶ木の葉のように大揺れに動いている。矢継ぎ早の改定で現場の教員は指針を失い、次々に変わる文科省の方針に疑いを持ち始めたためである。

「生きる力」の目的は総合学習・体験学習で人間本来の力をつけ、児童生徒を学習で追い詰めるのではなく、心に「ゆとり」を持たせることと書かれていた。さらに、男女共同参画社会の実現に向けて全高校の家庭科を必修科目とした。男性が母親の役割を果たすことを無意味と考えるわけではないが、男性と女性は知的能力に違いはなくても、体力的にも行動力にも違いがある。古来日本では、母親は家庭に在って、子どもの躰教育にあたる最大の教育者であるときれて来た。母性愛には厳父を持ってしても敵うものではない。お国柄によっては同性婚を認めているが、人間という生物は神の思いやりを無視し、進化の峠を越えてしまったのではないかとさえ思える。近頃流行のイクメンなどという造語そのものが社会の異常性を是認しているかのようにさえ聞こえる。まして、核家族の多くなった現在、保育所や幼稚園が不足していると社会問題にさえなる世論は、親の経済エゴか社会構造の不備としか思えない。日本国は国土が狭

く人口も多い（産業界は勤労人口の減少を心配しているが？）日本が世界の中で生き残る道は唯一つ、高い能力から生み出す新開発とそれを支える伝統的な勤勉さ以外にはないのである。日本の食糧自給率は四十パーセントを割っている。日本人が田畑を耕してかろうじて暮らせたのは、自給自足が可能であった江戸時代までであったのである。

ところが文科省は、国際テストで順位が急落するや、今度は急遽、主要科目の授業時数の増加に転じたのである。それよりも先、「ゆとり教育」の段階で学校週五日制を導入していたため、授業時数の加増には限界があった（日本はすでに週四十時間労働を批准している）その結果、子供たちも教員も以前にも増して多忙となり、若い指導者が精神を患うまでになったのである。その右往左往する現場を保護者が察知し、その結果、権利意識の強くなった親たちはやがて学校教育を軽視し、塾を頼り、モンスターペアレンツと変わっていったのである。子供たちは教師に対して敬意を失い、「仰げば尊し」は急速に形骸化していった。

学者や有識者といわれる人の中には「子どもが学校に行きたくないと云うなら行かせなくてよい」を持論としている人がいるが、こ

れは無責任な発言である。確かに学校以外にも学ぶところはあるが、人が人とのつながりの中で学ぶことは知識以上に大切なものがある。不登校やひきこもりは集団の中でこそ回復が期待できるのである。クラスの中に数人の援助者のグループを作れば、自立できるチャンスは多い。いや、これら心の弱い子どもを救えるのは集団の中でしかないと言っても過言ではないのである。今や、学校教育は過去の経験から学び、親御さんたちの「信」を取り戻すことが急務である。それには、堅実な教育観を持ったトップリーダーを持つことである。

腑に落ちないのは結果責任があると思われる当時の教育課程作業者に、国の最高栄誉章が贈られていることである。失政、失策に与えられる褒章など、どの国のどの時代でも聞いたことはない。もつとも、わが国の民は寛容なのか政治家の失政が後日問われることなく、民間会社のトップの失策は、その個人が退任してしまえば刑事問題以外責任を問われることもない。

「ごまめはぎしの齒軋り」ではないが、わが国の最高栄誉章である文化勲章の実物が古物商のウィンドウに陳列されるご時世である。もつとも、勲章そのものに価値があるわけではなく、それを頂いた人の

功績に対しての章であるから目くじらを立てることもないのだが、この功績が誰の推薦でどの角度からかとなると疑問が残らないわけではない。真偽のほどは知らないが、夏目漱石はこの「章」を遠慮したと、ものの本で見たことがある。その理由は「私よりも功績があり、立派な書物を書いている人が沢山いる」というものだったらしい。漱石らしいと言えばそれまでであるが、私は最高荣誉賞を受賞し、俳句のテレビ番組に臆面もなく選者として出演している何某氏よりも漱石に拍手を送りたい。古くからの諺に「冠かんむりは取りに行くものではなく、他人ひとが冠かぶせてくれるものである」ともある。これこそが価値ある勲章なのである。

我々が小学生のころには、「金鷄勲章きんしくんしょう」という言葉がまだ残っていた。見たことはないが、戦争で勲功のあった人に贈られる名誉ある章であつたらしい。現代ではその言葉さえ知っている人は少なくなつた。軍事強国を目指す幾つかの国々は、現在でも胸から腹まで勲章を並べて雛壇に並んでいる人を見かけるが、体制が変わった時、それらの勲章は溶かされて子どもの玩具に変わるかも知れないのだ。第一に特別な人でもない限り、自分の存在を記憶してくれるのは孫か曾孫の代までである。考えてみればお墓さえ意味を持たない。